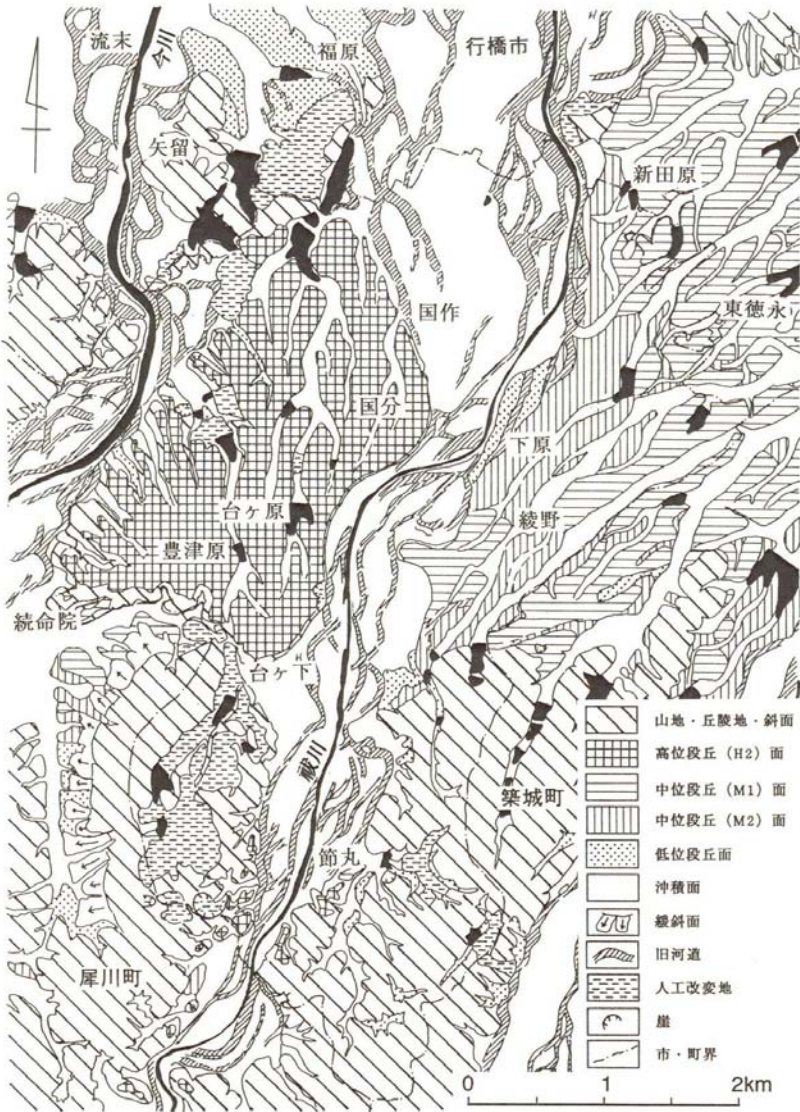


第二節 豊津町の地形

二〇万分の一土地分類図「福岡県」(福岡県、一九七〇)では、北九州から周防灘沿岸に広がる平野を豊前平野とし、今川・祓川などの沖積低地を京築低地、その南方の台地を京築台地とした。それより更に南方の山地を英彦山・古処山地と呼んでいる。

また、五万分の一土地分類基本調査「行橋・蓑島」(福岡県、一九七〇)、「後藤寺」(福岡県、一九七二)によると、これらの図幅において今川、祓川流域では、山地は英彦山山地、犬ヶ岳・求菩提山地、犢牛・蔵持山地、飯岳・戸城山地、岩石山地に分類され、今川は上流部では英彦山山地と岩石山地の境界部、中下流部では犢牛・蔵持山地、飯岳・戸城山地、岩石山地の境界部を流下する。一方、祓川は英彦山山地、犬ヶ岳・求菩提山地、犢牛・蔵持山地の境界部を流下する。丘陵地は京都丘陵、行橋・荻田丘陵群とされ、台地は、今川・祓川流域台地を構成する豊津原台地、新田原台地、低地は今川谷底平野、祓川谷底平野とされている。千田(一九八四)は、周防灘西岸の北九州から豊後高田に至る平野を豊前平野とし、その中の、行橋を中心として荻田から椎田までの平野を行橋平野と呼んだ。また行橋平野は飯岳地塊列により二分され、北部は三角州性平野、南部は扇状地性平野で特徴づけられると考えた。

ここでは行橋を中心とする京都郡の平野を行橋平野と呼び、その中に点在する丘陵を京都丘陵、飯岳地塊



第7図 豊津町の地形分類図

列の南方の台地を豊津原台地、新田原台地と呼ぶことにする。

豊津町の地形は丘陵地、台地、低地からなり、山地は存在しない（第7図）。

一 丘陵地

一般に、山地と平地の中間的な地形で、比高三〇〇メートル程度以下で、開析は進んでいるが、背面が著しい定高性を示すものを丘陵と呼んでいる。このような定義で山地と丘陵地の区別をすると、丘陵地は丘頂部の緩斜面ないし平坦面、丘腹斜面、開析谷沿いの小段丘面、丘麓緩斜面、谷底面を含む複合的な地形単位となる。

豊津町の地形で最も海拔高度が高いのは、今川と祓川の間、京都ゴルフ場南方の採石場のある二〇五・三メートルの峰である。また、祓川と城井川の間は豊津町、犀川町、築城町の三町界にある二〇三・二メートルが最高である。いずれも、比高が二〇〇メートル以下であり、開析のされ方、なだらかさなどからみて、山地とするより、丘陵地としたほうが妥当である。

豊津町の丘陵地は、犀川町の本庄池南方から東南東方向に築城町伝法寺までの線を境として、傾斜が急変する。これより北方は緩やかに行橋平野に向かって傾き、その頂部も平坦面的な緩斜面である。今川と祓川の間地域では、上荒谷付近で、丘陵地から台地に変わる。また、祓川と城井川の間では、光富から北東方向へ築城町船迫、安武を結ぶ線までが丘陵地で、それ以北が台地部、以南が丘陵地である。丘陵地は、更に

台地の北端部の行橋平野低地部で、残丘状に点在し、矢留の丘陵、かつての八景山、視山から元永に至る残丘群、杵尾山、養島山、二先山などへ連続する。

豊津町の丘陵のうち、築城町との境界に位置する一六三・一^{メートル}峰から北へ一三五・二^{メートル}峰付近までは丘頂緩斜面と平坦面を示している。

二 台 地

豊津町の台地は、河川により二つの地域に大きく区分される。今川と祓川の間の台地は豊津原、祓川と城井川の間は新田原と、それぞれ名づけられている（福岡県、一九七〇）。また、祓川沿いには河成段丘が分布している。これらの台地は高度的に高位、中位、低位の各段丘面からなっていることから、それらを順次説明する。

(1) 高位段丘（H₂）面

豊津町における高位段丘面は、行橋平野全体のH₂面が最高位である。今川と祓川に挟まれた豊津原に分布する段丘面で、扇状地礫層が堆積し、祓川の扇状地として形成されたものである。分布高度は、最高所の台ヶ下で八六・二^{メートル}、最低は八景山付近の四〇^{メートル}である。本段丘面は、北および北西方向へ〇・八八度の勾配で傾くが、上流側に当たる南部には風隙の地形が幾つかみられる。特に上荒谷では、上流側に浅く開いた谷があり、海拔七〇^{メートル}の地点に分水界がある。これはH₂面形成後、開析される過程で、当時のこの地点で